
ターゲット・イズ・メシア

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ターゲット・イズ・メシア

【NZコード】

N5013Y

【作者名】

ジエフティ

【あらすじ】

これは破壊者の物語。聖夜事件から15年、抑圧から協力の平和へと歩みだした近未来。国連空軍に所属するイザヤ少尉に異動命令が下された。国連軍対VMC部隊。イコンと呼ばれる特殊な人間とトップエースによつて構成されるその部隊に彼は新型兵器メサイアのパイロットとして選ばれる。15年後の世界で明かされる眞実。新たな救世主が現れる時、破壊の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

自分の中でも禁忌を犯したものです
プロジェクト・メシアを読んだ方もそうでない方もお楽しみいただ
けるように作っています（つもりです）
それではどうぞ

プロローグ

プロローグ

今の俺は歓喜と不安に満ち溢れていた。

手元にある異動令状、それには「国連軍対VMC部隊異動命令」と書かれ、その下にはつらづらと小さな文字が並んでいる。

「あの……これは本当に……」

「ああ、そうだ。君は国連軍対VMC部隊に異動となる」

現国連軍司令官、進藤海希はそう言つた。

今から15年前。俺が、まだ子供だったころに世界を震撼させる事件が起きた。

世界大戦が終わって、束の間の平和が訪れた世界を一気に混沌に陥れた存在、V M C = Variable Metal Cell 金属で構成されるその特殊な単細胞生物は人や動物、車や兵器、あらゆるものに侵食した。

そして、国連軍上層部、平和審査会と呼ばれる組織によりVMCを使用した人類進化計画が始まった。

ヤハウエ・キリストというキリストのクローンを名乗る男がそのまま幻想じみたことを起こしたのだ。

聖夜事件と後世で伝えられるそれは多くの人々を死に至らしめた。宇宙へ行つた人間の半数以上は死亡し、地上に残された人間の多くも殺された。

その中で救世主の名を冠する兵器を駆り、戦いを止めたものがいた。アダム少佐、彼はメシアと呼ばれるVMC技術を流用したハイスペックマシーンを駆り、戦つた。今では軍の教本でも歴史の教科書でも出てくる英雄である。

俺はいま、その英雄が率いていた部隊に配属されることを言い渡されたのだ。

そのトップ部隊、国連軍対V.M.C部隊は相当な技量を持つエースであるが、もしくはクロスリアクターという動力炉を操る力を持つ「イコン」と呼ばれる人間に限定される。

「いいか、君は重役を担わせられる。イザヤ、15年ぶりに見つかったイコンなんだ。失望させないでくれ。」

進藤司令がそういうて俺は退室する。

『イコン』

重苦しい響きだった。俺にそんな才能なんて無いはずだ。

今まで何年も従軍兵士として国連の平和維持活動に参加してきたがそれとはまったく違った重圧が俺を襲つた。

Act:1 救世主『メサイア』

「よつこじや、国連軍対V.M.C部隊へ」
ワシントンにある部隊の基地に着くと俺は途端、教本でみた人物に握手を求められた。

聖夜事件の際、マフディーといつ機体を駆り、アダム少佐とともに戦い、平和審査会の一員にして当時の国連軍の司令官であったカマエル・ウリエルを殺害した人物。

褐色の肌をした彼は赤いスカーフを括り付けた腕を差し出すと、俺は固く握手を交わした。

「俺は一応ここの中隊長をしてるソランだ、君が噂のイコンか？」
「サー、国連空軍第13航空師団より異動してきたイザヤであります。サー」

それを聞くとソラン大尉は苦笑して口元に手を当てる。

「少尉、ここはお堅い正規軍とは違つてね楽にしていいよ」
大尉がそう言ったので俺はキヨロキヨロしながら周りを見渡す。確かに国連空軍とはちょっと違つた印象を受ける。

「さて、君が来たからにはようやく彼が目を覚ますわけだ」「彼……ですか？」

「そうだ、救世主 メシア だ」

対V.M.C部隊の基地は随分と古ぼけていた。俺が抱いていたハイテク機器がうごめいているイメージとは違つた。
廊下はだんだんと薄暗くなつていく。その割にカビだとか埃だとかは一切無く、整備が行き届いている。

「さて、ここだ」

大尉が足を止める。薄暗くてよく見えないが分厚い扉のようなものが見えた。金庫のように頑丈な扉。大尉はその隣にあつたコンソ一

ルを操作し、網膜パターン認証によるロックを解除すると扉はプシュッと音を立ててゆっくりと開く。

中身は真っ暗だった。何も見えない。

「じゃあ、そろそろお目見えかな」

大尉がそう言うとバチンという音が鳴った。それと同時に、部屋は一気に照らされる。

「……これって」

言葉を失った。目の前にあつたものは巨大なロボット。それも西洋騎士のような出で立ちの。胸に刻まれた紋章のような十字が高い天井から照らす光を跳ね返している。

「メシアの後継機、メサイアだ。君がイコンに選ばれたのはそういうことだ。これが地球に残存したVMCを根絶するための要となる」「それで俺がイコンの適性検査に合格して」

「そういうことだ」

大尉は腕を組み、壁にもたれた。俺はただただその新型機に見っていた。純白の機体はまさに15年前の救世主 メシア だった。

「なんで俺たち対VMC部隊が解体されないか、君は知ってるか?」途端、大尉が俺に聞いた。

「政治的なプロパガンダの為……ですか?」

「それもある、でもそれは二の次だな」

大尉はそう言うともたれ掛かっていた背中を上げ、俺の方へとゆっくり近づく。

「確かに、今の技術は進化した。あれから15年経つて人間はVMCと対等以上と戦えるようになったからな?」

メサイアの前で足をとめ、俺の方を振り向くと大尉は同意を求めるように首をかしげた。俺は首を縦に振る。

「でも、キマイラじゃどうにもならない事が……いや、この話はまだしないほうがいいか」

そういうつて大尉は電気を落とすと自動ドアのコンソールへと向かう。「いいか、君はこれから一週間後の作戦には参加してもいい。それまでに戦えるようにしててくれよ」

「……サー、イエッサー」

疑問は残っていた。俺がなぜ選ばれたか、プロパガンダも一の次にするほどの理由とは何だったのか。

けれども今の俺にはただ返事をする以外には無かつた。

メサイアのスペックは俺がこの前まで使っていたキマイラをはるかに凌駕していた。現行機とは比にならないスピード。そしてそれに負けない旋回速度。あまりにビーキーすぎるのだ。

当時、これの数倍のスペックを叩きだしたというアダム少佐というのがどれほどの人物か伺える。

途端、体中に衝撃が走った。被弾したのだ。振動がコックピット全体に響いて警告音がけたましく鳴り響く。

「クソッ、ビーキー過ぎるぞコイツ……」

『警告、撃墜の危機』

警報のシステム音が鳴る。それからややあつて俺の周りは真っ暗になつた。

「どうだ、シユミレーターのご感想は？」

ブショウツとロックが外れる音がして暗闇に光が差し込んだ。

「ビーキー過ぎますよ、シユミレーターの設定あつてるんですか？」「文句は整備班の連中に言つてくれ。でも、メサイアが一筋縄でいかないのは事実だ」

「はあ……」

ため息を着く。コースだけ部隊にいること自体、結構辛いことだ
がまさかここまでキツイとは思ってなかつたのだ。

するとシユミレーターの置かれたこの部屋のドアが開いた。その中
から黒髪のポニー・テールの女性が現れる。

「ソラン、調子は？」

「まあ、これからつてところか。彩、ちょっと相手をしてくれない
か？」

大尉がそう言つとアジア系の顔をしたポニー・テールの女性は俺の使
つているシユミレーターの隣、もうひとつシユミレーターに乗り
込む。

「さて、貴方が噂の少尉さんか……」

ハツチが閉まり、シユミレーターの画面が表示される。緑色の文字
列が現れ、シユミレーションの開始を合図する。
ペダルを押し込んだ。メサイアは急加速し、敵の懷へ入り込む。そ
の間、敵に関する情報が次々に画面に表示された。

『スサノヲ』画面にはそう表示されていた。

「貰つた！」

右手に持つたソードを振りかざす。直撃コース、この距離ではよけ
きれまい。

しかし、気づいたときには画面が真っ赤に染まつっていた。被弾した
のだ。

なぜかはまったく分からなかつた。そしてそれから間も無くして回
りは真っ暗になつた。

「惨敗か、残念だつたな」

大尉はベンチに腰掛けて缶コーヒーを飲みながらそう言つた。

「どうしたことですか、急に撃墜されて……こんなのおかしいです
よ」

するとそれを聞いた大尉は首を横に振つた。

「どうりで三日後にお前は彩ともう一度戦つてもいい。負けたら作戦には出さないし給料もカットだ」

「そんな……」

俺はショミレーターから出て行く女性を見やつた。

桜井彩。聖夜事件の際、自衛隊の対V.M.C部隊のパイロットとして戦つた英雄の一人。それに勝てと言うのか。

大尉が部屋から出て行く。俺はコーラを一本買つと自販機に蹴りを一発食らわせた。

「どうだ、彼の調子は？」

喫煙室で携帯電話を持つてソランはタバコを吸う。電話の相手は国連軍司令官、進藤海希。

「まだ何とも言えませんね。まあ、俺でもあの機体は使いこなせませんよ」

「救世主殺し イコノクラスマ の機体か……」

電話の向こうで進藤が呟くように言った。

「責任をとらなきゃいけないのは分かります。それでも俺はアダムさんが。……いや、少佐がそんなことをしているようには思えなくつて」

「それは俺だつてそうさ」

あれから俺は必死になつてショミレーターに挑んだ。機体のビーキーさは相変わらず。敵を撃破するよりも前に俺がメサイアのスピードについていけない。

バーチャルだからいいもののリアルだとしたらせつと地面上にぶつかつてすぐに『ドカン』だろ？。

でも、そういうわけには行かない。俺は選ばれた。この何十億という人間の中から唯一メサイアを操れる者として。

『いいか、君は重役を任せられる。イザヤ、15年ぶりに見つかったイコンなんだ。失望させないでくれ。』

進藤司令の言葉が頭の中で勝手に再生される。

「わかつているさ」

俺はふてくされながらしつづくとまつ一度シユミノーターを起動させる。

『Are You Ready?』

システム音声がそう言った。俺はマイクに向かって「はじめてくれ」と言つ。それからして田の前に架空の空が映し出される。作り物のGが俺の体を縛り付ける。実戦はもつとつらいんだろう。しかし俺の中にはそれでも戦おうという使命感が生まれていた。

「ソラン、いいの？」

「なんのことだ？」

模擬戦まであと1日となつた晩、彩は自宅でソランにそう尋ねた。基地から少し離れた住宅街の一軒やに一人は住んでいる。

「シユミノーターの何度設定の話よ。一番難しくなつてたじやない。あんなの私だつてどうだか……」

「少尉の骨を折るにはちょうどいい。それにアダムさんも最初はあしてクラウドマン司令にじこかれたらしいしね」

「歴史は繰り返す……ね」

彩は食卓に料理を置きながら言つた。

ビル・クラウドマン。聖夜事件当時の国連軍対V.M.C部隊の司令官。言い換えれば今のソランの立ち居地である。

彼はアダムと彼の恋人、リリスを逃がすため。平和審査会に口を割

らないために自殺した。そのためか彼に関するデータは極僅かで20年近く前の国連軍司令官というのに資料の一切は彼の手によって削除され、彼の情報はソランや彩、進藤などと言つた当時を知る人物の頭の中にのみ存在している。

「でも、あの動きでスサノヲに勝てるのかしら？」

「さて、どうだか？」

ソランはフォークを握る。空いた左手でコップをつかみ、水を一杯飲み干すと右のフォークでサラダを突いた。

その日の朝、俺は早くに格納庫へと呼び出された。そこに並んでいたのは巨大な人型兵器。それも二体。

片方は俺が乗るメサイア。もうひとつのは現在コンペティションに出されている機体、次期主力機候補として名高い「スサノヲ」という機体だった。

名前の由来はニッポンの神話からきているらしい。聖夜事件当時、桜井彩大尉が乗っていた「イザナミ」という機体をベースに作ったそうだ。太い腕が特徴的でボクサーのようにも見えた。その太い腕の正体というのが内臓型の対VMCプラズマガトリングガン、そして腕をミサイルのように発射するシステムが内臓しているからだ。主に近距離から中距離での戦闘を得意とするこの機体はコンペでも結構な評価があるらしい。

「イザヤ少尉、調子はどう？」

後ろから大尉が声をかけてきた。ピチっとしたパイロットスーツを着て長い髪をまとめる。彼女の姿はとても美しいといふか凜々しい。

「まあ、ボチボチですかね」

「そんな生半可な気持ちじゃ私には勝てないわよ」

小型の昇降機を使い、コックピットへとあがりながら彼女は言った。分かっているさ。ここで勝たなきや俺はこの部隊に飛ばされた意味

が無くなってしまう。

俺は大尉に続くようにして昇降機を使い、首筋の方にあるメサイアのコックピットへとあがつた。

コックピットへ入ると徐々にその中に明かりがともり始めた。360度を見渡すことができるオールビューモニターが外の景色を映し出す。

「少尉、ゆっくりと格納庫から出る。模擬戦はその先で行う」

「了解」

足元のペダルを踏んだ。ゆっくりと格納庫のシャッターから出る。その前には普段、戦闘機やヘリ、戦車などを置いておく巨大な平地となっている。ここで模擬戦を行うと言うのだ。

「こちらメサイア、所定ポイントへ移動を完了。いつでもいけ

「ちょっと待て」

俺が言おうとしている途端、ソラン大尉がさえぎつた。

「少尉、ついでにA.I.のテストもしたいんだが……いいか？」

「A.I.ですか？」

俺がそう問うと大尉は「ああ」と短く返事をする。

「模擬戦に支障を来たさないのであれば……」

すると大尉は「わかった、今からイヴのテストを行う。」と言つた。イヴ。聞き覚えはある。いや、聞いたことのない者のほうが多いのではないか。

アダムとイヴ。生命の実を食べ、エデンを追放された俺達の祖先。というのが聖書のだいたいの内容だつた気がする。

そんなことを考えながらメサイアと対になるように立つスサノヲを見る。後頭部から飛び出たコードが風になびいている。

その姿をぼんやりと見ていると突然、シートの下からディスプレイがゆっくりと上がり、目の前に固定された。

それからして、この画面に『EVA』と表示される。

「イコンの搭乗を確認しました」

何処からともなく少女の声が聞こえる。いったい何のテストだ？

「イザヤ、イヴの起動を確認した。模擬戦を始めるぞ」

「待ってくれ、いったい何のテストが」

「少尉、始めるわよ」

目の前のスサノヲのモノアイが赤く光る。風になびいていたコードは動きを止める。

「エンカウント」

またも少女の声が聞こえる。

「クソッ、教えてくれないのかよ」

ペダルを踏む。メサイアは脚部のバーニアを噴出し、空へあがつた。

「どうしたの少尉、逃げてばっかりじゃ負けるわよー！」

空中を飛び回るメサイアを追いかけるようにスサノヲの腕からペイント弾が放たれる。

「クソッ、弾幕が激しくて接近できない！」

腰の鞘からブレードを引き抜く。メサイアには射撃兵器が装備されていない。メシアも槍一本だつたらしがこれでどうしろというのだ。

「イコン、クロスリアクターの使用を提案」

またも少女の声が聞こえた。戦いに意識を集中させているせいか何処から音が鳴っているのかは分からぬ。

急反転を行う。俺だつてこの三日間何もしていなかつたわけではない。この機体の扱い方ぐらいは覚えたつもりだ。

弾幕は激しくなる。砲塔が回転する音。高熱のエネルギー弾が圧縮され、入っていた薬莢が地面に落ちてカラランカラランと音を立てる。

「聞こえなかつたのですか？クロスリアクターの使用を提案します」何がなんだか分からなかつた。この少女の声はいったい何なのか。メサイアのマニュアルは熟読したつもりだがこんな記述はなかつた。

「クソッ、もうなんでもいい。お前に任せるー。」

やけくそだった。でも逃げ回るよりはマシだと思つた。

「了解、クロスリアクターの起動を開始します」

途端、メサイアの胸の十字架が赤く輝いた。右手に携えていたブレードも光を放つてゐる。

「イコン、エクスカリバーを用いての一点突破攻撃を提案します

「エクスカリバー？ お前は何をいつて 」

「ほら、余計なこと喋つてると舌噛むわよ！」

鉄拳が飛ぶ。スサノヲの拳をギリギリのタイミングでブレードで受け止める。火花が激しく飛び散る。

「なんでもいい、早くやれ！」

「了解、ルートを表示します」

するとオールビューモニターには立体的にガイドビーコンが表示される。それと時を同じくして右手に持つていていたブレードは刃の部分がスライドしショートソードのような形であつた姿は長くなる。ロングソードといえぱいいのだろうか。

後方から、バーニアが点火するポイントからも赤い光が放たれ始める。

「どうか、こうじうことか！」

フットペダルを大きく踏み込む。足がゆっくりと上に向き、機体は地上を目指す。

腕を後方へさげ、エクスカリバーを構える。

周りの風景が一気に動き出す。メサイア自体が高速で動き始めたのだ。

「特攻でもするつもり！？」

大尉はそう言つたが僕はそのつもりは無かつた。

「イヴ、だつたか。」

「肯定です」

「進路は頼んだぞ」

「ラージヤ」

空中を滑るようにして降下する。

「弾幕の予測修正。ガイドビー「コン更新」

イヴがそう言うと黄色く点滅する三角形のビーコンは位置が修正され、新たに赤いビー「コンが表示される。

「クソッ、結構キツイカーブじゃないか！」

左足を蹴り出す様にして足裏のバーニアを噴出する。機体が回転するように方向転換しビーコンの間を通り抜ける。

「何よこの動き方、こんな使い方が

「とつた！」

エクスカリバーをスサノヲに突き立てる。脚部をスライディングのようにして、推進剤を一気に噴かして止まる。胸元の「ツクピット」すれすれで刃は止まつた。

「お見事だ少尉」

パチパチと拍手をしながらゆっくりとメサイアに近づくソラン大尉の姿がオールビューモニターに表示される。

俺はハツチを開け、昇降機を使って地上へと降りる。すでに彩さんも降りてきている。

「あんなに荒っぽい運転を出来たことはイヴの補助があったということか

「その、イヴというのは？」

「知らないか？当時メシアの搭載されていた独立型戦闘支援AI。まあ、公には公表されていない事実だからな」

「なんでまたそんなものを」

するとそれを聞いた一人は両者渋い顔をした。ソラン大尉は口に手を当てたまま何もしゃべらない。

途端に基地全体への警報が鳴り響いた。耳を劈くような警報音は都市部から迷惑がられるのではないかというレベルだ。

「国連軍より対V.M.C部隊に出撃要請。太平洋上空にて突然変異型を観測。直ちに出撃を開始せよ。繰り返す」

「……どうやら予想より動きが早かつたみたいね」

「それはそういう……」

「いいから少尉と彩は実弾に切り替えて出撃しろ。俺は後から追つ

「……了解」

俺は格納庫まで機体を動かすと後は機械がオートマチックで射出用エレベータまで移動させてくれた。

この先に続くのは”アノ”救世主も使っていた場所。この《メサイア》は結果的に《メシア》の全てを引き継いでいることになる。ガクン、と安全装置とドッキングした音がして機体が大きく揺れる。暗い中をメサイアは射出口めがけて移動していく。エレベータのようなこの装置は火花を散らしながらゆっくりと上へ昇っている。暗い、戦場までの旅。コックピットには《イヴ》だけがぼうつと光を放つている。

「敵つてのはどれぐらいのものなんだんだ？」

俺はそのイヴに問う。

「敵、V.M.Cは海洋型増殖タイプと飛行型雄タイプの交配種と思われます。つまり、水中でも空中でも戦うことができると判断されます。」

「それはまた厄介な……」

俺はレバーの付いているところに肘をついて頬杖をついた。今朝、剃つた髭が微妙に残つていてチクチクした。

「イコン、まもなく発進です。準備お願いします」

頬杖をついた途端そんなことを言い出したので少々嫌な気分だった

がそれでも俺は仕方なくレバーを握つてフットペダルに足をかける。暗いエレベーターという名の洞窟に光が差し込んだ。上方の射出口のシャッターが回転しながら開いていく。

白銀の聖騎士。メサイアにその光があたつた。装甲にあたつた光は乱反射し、あたりを照らしていく。

「こちらメサイア、出撃するぞ」

「了解した、全員生きいて帰れ。これは命令だ」

ソラン大尉が言った。その言葉、その命令は俺の心にどつしりと重く、深く入り込む。

「メサイア、イザヤ出るぞ」

フットペダルを強く押す。メインスラスターが点火する。赤い眩い光を放ち、メシアは飛んだ。

青空を飛ぶメサイア。騎士が空を飛ぶ姿というのはいたしかじゅるかもしれない。

胸のクロスリアクターが赤く光り、その光を撒き散らすかのようにメインバーニアともども噴出していく。メサイアは他の機体、マスラヲを始め、あらゆる機体を凌駕した速度で飛行する。メシアは光速で移動できたというのだからおかしくはないのだろう。

「イコン、敵、広域レーダーに反応確認。」

「どれくらいで接触する?」

俺がそう問うとイヴの画面は計算式のようなもので一気に埋め尽くされた。頭が痛くなるような数式が山ほど出た後、通常の画面へと戻る。

「あと、1分です」

「了解」

俺はそれを聞いてペダルにかける力が更に強まつた。

マフディー。イスラム教で救世主を現すもの。

美しく、どこか女性的で男性的なそのフォルム。異質、奇形……彼らでも形容できるその姿。そのマフディーは周りに機械に取り囲まれて随分とアウェーな環境にいた。

キャットウォークからソランはマフディーの首筋へと近づく。彼がそこに触れるや途端にマフディーは首に風穴を開ける。まるでそこに入れとでも言つよつに。いや、入ることを両者望んでいるのだろう。

「アダムさんは、関係ないはずだ」

ソランは小さくつぶやく。どこか虚ろに、どこか悲しげに。精神を統一する。あらゆる視覚情報がマフディーを通してソランの脳へとフィードバックされる。記憶を「」ピーしていくかのようにあらゆるビジョンが映し出された後、格納庫が見えた。ソランが足をゆっくりと踏み出す。それに連動してマフディーを動き出す。

いつもと変わらない。俺は対VMC部隊のリーダーだ。ソランは自分で言い聞かせる。

その途端、マフディーの姿は瞬時に消え、虚空へと移動していく。瞬間移動。超高速で移動し、敵を切り裂く。マフディーに「えられた力、戦闘スタイルはまさにそれだった。

細く、長いその四肢を伸ばし、救世主は飛び去った。

目の前に居たのは奇形の魚だった。白金に光り輝く巨大な魚は翼のようなヒレを羽ばたかせ、空を飛ぶ。

その奇妙な光景に呆気を取られている俺を尻目に後続のスサノヲ、

彩大尉が姿を表す。

「で、これが件のＶＭＣ？」

大尉がそう聞くので俺はイヴに「そうなのか？」と尋ねる。するとイヴは何のためらいもなく「肯定です」と答えた。

「なるほどね……」

つぶやくようだ大尉はいつ。

奇妙なＶＭＣだ。今まで空軍で多くのＶＭＣと戦つてきたがこのようないい奇形は初めてだ。過去にも双子だの奇形児だのいたらしいが今ではそれが妙に増えているらしい。15年前、ＶＭＣのコアとなる『クイーン』を倒してしまった影響か、聖夜事件以降、残存したＶＭＣは独断で動き出す。指導者のいなくなつた野蛮な生命体の末路ということだらう。

「少尉、散開して仕掛ける。あなたは右側を」

「了解」

ペダルを踏み込む。

「イヴ、エクスカリバーを」

「了解、クロスリニアクターのエネルギー・ラインを全てエクスカリバーに」

イヴがそういった途端、右手に持つた剣が大きく開いた。刃が左右に分裂し、スライドする。芯に通つたエネルギー・ラインが赤く光り、クロスリニアクターからエネルギーが送られている。

ガイドバー・コンがオールビューモニターに表示される。敵への最適なアプローチ。これでは機械に頼りすぎだ。とか言われそうだが実戦ではそんなことどうだつていい。重要なのは勝利すること。

ここでＶＭＣを倒さなければアメリカにも被害が及ぶ。責任をひしひしと感じながら俺はペダルを踏んで加速した。

ビーコンが大きくなつていき、それを通過する。メサイアに合わせ、反対側より飛翔するスサノヲの姿が見える。

「イザヤ少尉、こつちは空でしか戦えない。向こうが海に入つたら終わりよ。一撃で仕留める」

「了解です、大尉」

無線ウインドウに表示された黒髪の女性に向かい、俺はそつまつと視線を《奇形の魚》へと戻した。

俺にとつては対VMC部隊での初陣だが、ここで失敗すれば空軍で何をやつてきたのかということになる。

レバーを持つ手に汗が伝づ。蒸れた対Gスースは暑い。でも、それをも感じさせないほどの興奮状態、アドレナリンが分泌されている。「敵、予測軌道より離脱。緊急コース変更。しばらくお待ち下さい」途端、すべてのビーコンが消失する。俺はマニュアル制御で反転して高速で飛翔する魚の後ろを取る。その魚の姿は空という水の中を泳ぐようだ。カジキのごとく進むVMCに対し、スラスターを全開にして追いかける。

「コース形成完了。イコンへ通達、目標へと接触までおよそ5秒」「了解！」

メサイアは足を回転させ、体をひねる。エクスカリバーを振り払い、聖騎士は突撃する。

「少尉、悪いけど追いつかない。作戦を変えるわ、私はあなたの援護をする。早く行きなさい！」

眼下でスサノヲが見えた。その赤と白の機体は髪のようなコードを振り乱し、腕の装甲をリフトアップさせる。射撃兵装のプラズマガトリングが姿を表した。砲塔が回転を開始し、眩い光が先端に集まる。

「少尉！」

大尉が叫んだ。俺はそのまま逃げるVMCへと接近する。このスピードではまもなくアメリカ本土へと入る。その前に何とかしなければ

しかし、その途端VMCは急に角度を変更した。そう、水中へと。海へ逃げられたら今のメサイアには限界がある。そして湾に出られてしまえば連中の思う壺だ。

オールビューモニターに赤いウインドウが表示される。秒数と剣の

アイコン。

「イコンへ警告、まもなくエクスカリバーの使用限界です。」「クソッ、そういうことは早く言え!ビーコンを消せ、手動で何とかする」

「よろしいのですか?」

「構わない、いいからやれ!」

「……ラージヤ」

そうして、黄色いビーコンは消え、モニターには海と空が映った。遠くには西海岸の街並み。

「間に合ええええええええッ!」

一気に加速し、敵の前へと出る。直後、急降下する。エクスカリバーを構え、そのまま海へと落ちる。

「警告、トリムアップを開始。」

「余計なことはするな!セーフティを切れ!」

俺がそう叫ぶとイヴは「ラージヤ」と言つて全ての安全装置を切る。「何やつてるの!死ぬ気!?」

大尉が叫んだ。それでも俺は黙つて操縦に集中する。両手でエクスカリバーを構える。残り時間はあと5秒。海面が目の前に近づく。

「やめなさい!海面に機体を打ち付けて死ぬわよ!」

それでも俺には策があった。無謀かもしけないが俺の計算が正しければ……

「来た!」

思わず俺は心情を声に出す。VMCは突撃する俺の真下を通り。メサイアはそのまま降下し、エクスカリバーを突き立てる。

途端、モニターが赤に染まった。VMCの血液、メインカメラがそれで染め上げられる。そして敵を突き刺したままメサイアは海へと入る。衝撃は突き刺されたVMCに響き渡り、金属のヒレはもがれていく。

「イヴ!脚部バーニアを全開にしろ!」

「ラージヤ」

ボコン！と水中でバーニアが火を吹き、あたりの水を瞬時に蒸発させる。そうして出来た水蒸気の中、海水で血液を洗い流したメサイアが現す。

俺は長く感じられたたつた数秒の戦闘に疲れ、イヴにバーニアコントロールを任せた。

汗でびっちょりとなつた対Gステッスをパタパタとして俺は、ふう、と息を吐いた。

それにしても一つ、気になつた点があつた。VMCを倒し、任務も達成した。しかし、ソラン大尉が未だに合流できていない。まさかあの人人が途中で撃墜されたとかそんなことはないだろう。しかし、ここまで遅いと怪しく思えてしまう。

俺はオールビューモニターに表示されたエクスカリバーの冷却状態のウインドウを見ていた。クロスリアクターのエネルギーを蓄え、それを開放した状態であるエクスカリバーは煙をあげている。それほど膨大な熱量でなければ倒せない相手ということだ。

「大尉、隊長は大丈夫なんですかね？」

俺がそう聞くとエクスカリバーのウインドウの下に大尉の顔が表示される。

「さて、どうしたんだか。でも、ここまで遅いと何かありそうね

」

途端、警報がなつた。無線を介してスサノヲの警報も聞こえてくる。輪唱のようになつたその警報音は工熱源の接近を表している。レーダーを見る。急速に移動する光点が2つ存在していた。一つは隊長の　マフディーのIFF。そしてもう一つは

『Messiah』

目を疑つた。『Messiah』即ち救世主

そしてその一機は互いにその手に持つた武器でつばぜり合いをした

まま高速に動いている。マフティーの両手から飛び出した銀色のブレード。そしてもう一機、《Messiah》と表示されるその機体を俺は凝視する。黒い騎士、とても救世主とは形容しがたい漆黒の騎士。その手に持った漆黒の槍でマフティーを弾く。

2つの救世主はスサノワとメサイアの間を風を切り裂き、通りすぎていく。

「彩、少尉！早く援護しろ！俺だけでは限界がある…」
隊長が息を切らしながらそういった。

俺は訳もわからないままその2つの救世主を見つめていた。

白銀の救世主と漆黒の救世主。

両極の一機は剣を、槍を互いに火花を散らして弾き合しながら加速する。

「少尉、ボケッとしてないでさつさと援護しなさい…」

俺の右側、腕の装甲の下から出たガトリングを突き出しながらスサンヲは通りすぎていく。

「何なんだアイツ……」

「対VMC用機動兵器メシア。私のデータベースによればそれ以外は考えられません」

メシア。

救世主。

英雄の機体。

それがなんで隊長のマフティーと戦っている？

俺の頭の中は真っ白になっている。一体どういったことだ。あの《救世主》はなんだ？と。

「少尉！」

隊長の怒声がスピーカー越しに俺の耳へ、頭へ響いた。それを聞いて俺は冷静さを取り戻す。目の前にいる敵を何とかしなければならない。それが一体何であろうとも。

ゴクリ、と唾を飲み込んで歯を食いしばる。黒い点と白い点。2つの点が火花を散らしているのが見える。

「イヴ、何か射撃兵装は？」

「無論あります。エクスカリバーのエネルギー開放を行いますがよろしいですか？」

俺は「構わん、早くやつてくれ」といつとイヴはその少女のような声で小さく「ラージヤ」と言った。

冷却率が再び下がり、ブレードの刃大きく展開する。開かれたエクスカリバーの奥から赤い光が満ち溢れ、俺はそれを件の救世主へとむける。

ロックオンサイトが表示され、ブレードの奥、柄の部分よりゅっくりとライフリングが姿を現す。

「エネルギー充填まで残り20秒。」

「もつと早くできないのか？」

「不可能です」

機械に冷たく返された俺は鼻で笑つて画面の十字、照準器を見つめる。

激しく動く2つの救世主。狙いは定まらない。

「クツ、もう少し接近しなければ」

ペダルを踏む。メサイアが移動すると同時に、黒い救世主を追いかけていたロックオンサイトは姿を消す。

こうなればむしろ突撃したほうがいい。近づいて撃つたほうがいい。

「大尉、援護願います！俺が一発食らわせる！」

加速する。ガトリングを放つスサノヲは無言で接近し、俺の前方に弾幕をまき散らしていく。

「隊長、ちゃんと回避してください」

マフティーがブレードを強く振り払う。それに押し出され、槍と共に

に空へ投げ出される黒い救世主。

俺はその飛ばされた機体へとエクスカリバーを向ける。

「エネルギー・ライン全段直結、チャンバー内加圧正常、ガンレティクルを表示。」

緑色の円のようなものが表示される。真ん中には十字。俺はそれにヤツを捉える。

「撃てます」

イヴがそういうつた途端、俺はレバーに付いた引き金を引く。エクスカリバーの中心、銃口から赤い閃光が放たれる。

するとメシアは急反転した。その大きな槍を持ち、それを俺の方へ突き立てる。一秒もない間に。

着弾。赤い光がヤツを包み込む。

しかし、何かおかしい。あたつた光はあの機体を軸に分散していく。

「まさか……」

目を見張る。レーダーに信号は残つたまま。もしやエクスカリバーからの光が途絶えるや否や、その赤い光を薙ぎ払うようにしてメシアは姿を現す。

「嘘だろ……当たつた筈だ……」

しかし、目の前のこととは現実。そうして呆気に取られている俺を嘲笑するかのようにメシアは槍を向けると、機体を虚空へと姿を消した。

バーニアが輝いた姿はない。まるでテレポートしたかのよつに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5013y/>

ターゲット・イズ・メシア

2011年11月27日20時52分発行